

花

雅彦は書斎にいた。昨年6月証券会社の取締役を辞任した彼は、以降ずっと家に引き籠もっている。今年の正月も自宅で一人過ごす予定だ。雅彦は独身、家族を持ったことはこれまで一度も無い。会社の業務が多忙であったことは事実だが、果たしてそれだけの理由だろうか。

雅彦は机の引き出しの奥から古い黒革の手帳を取り出した。手帳には50年の時を経て劣化したカラー写真が挟み込まれていた。長い髪の少女。ほんの少し首を傾げ微笑んでいる。セピア色した在りし日の景子の姿だった。

テレビからは能登地震関連のニュースが絶え間なく流れている。

……景子の車で能登半島を旅したことがあったなァ。

雅彦は目を閉じた。

雅彦と景子は東京世田谷区にある私立大学の同期生だった。ともに経済学部経済学科で、ゼミも同じであった。ふとしたきっかけで学食で話をするようになり、映画を観たり劇を観に行ったりとやがて親しく付き合うようになった。特に劇団シェープルドールの公演には二人とも足繁く通った。

景子は、身長が高いせいか痩せて見え、クールなイメージを人に与えた。だが、実際の彼女は饒舌で、話しながら長い髪をふわりと広げる癖があった。雅彦はそんな彼女に惹かれた。

親しくなったとはいえ、雅彦は地方のしがない公務員の息子、景子は都内の上場企業の社長令嬢であり、雅彦は場末の薄汚れたアパートに住み、景子は高級住宅街の白亜の豪邸に住んでいた。この経済的な格差は雅彦の心に暗い影を落とした。

大学を卒業したら給与の高い証券会社あるいは銀行に就職し、投資技術を学び、起業してやがて上場させ……。

雅彦は見果てぬ夢に溺れた。

雅彦は、大学4年の秋、第一志望であった都内の証券会社に就職を決めた。景子は就職せず大学院に進む道を選んだ。

「ねえ、能登半島を一周してみない、わたしの車で」

10月のある日、雅彦は景子からロングドライブ誘われた。景子は十八で運転免許を取得している。これまで雅彦は、車の運転が好きな景子から何度もドライブに誘われ付き合った。長野、千葉、茨城。しかし今回は少々遠い。

能登半島とは……。

「ねえ、行くの、行かないの」

結局雅彦は景子に従った。

当日の朝、待ち合わせた大学の駐車場に白いベンツに乗った景子が現れた。ブルーのジャケットに白いパンツスーツ姿で運転席に座る景子は、早く乗れと目で合図を送った。雅彦はセーターにジーパン姿。普段着と変わらない。雅彦が旅行鞆を持ったまま助手席に乗り込むと、景子は長い髪をふわりと広げ「さあ、行くわよ」と言ってアクセルを踏み込んだ。

景子は、関越自動車道で新潟を経由して金沢へと向かうルートを選んだ。高速道路は渋滞もなく、また景子が制限速度を超えるかなりのスピードで飛ばしたせいでもあるが、サービスエリアで休憩を挟んだものの、金沢へは5時間余りで着いた。

その日は金沢市内の観光スポットを幾つか巡り市内のホテルに一泊した。

二人は同じベッドで抱き合って寝た。

俺たちこれからどうなるのかなァ。

雅彦は傍らでスヤスヤ眠る景子を見つめ自問した。

翌日二人はホテルを出て、気多大社、巖門、白米千枚田、禄鋼埼灯台、見附島など能登半島の名所を回って、再び金沢へ戻り同じホテルに泊まった。禄鋼埼灯台では、景子にせがまれ、彼女のカメラで海を背景にモデルのようにポーズを決める彼女を撮ってやった

半島から望む海は眩い光に満ちていた。青い海も白い波も岩も眩い光に満ちていた。

次の日、景子は東名・名神経由で幾つかのサービスエリアで休憩を挟みながら、行きと違って今度はゆっくりとした速度で東京へ向かった。

このロングドライブの費用は、ホテル代含め全て景子が支払った。

ロングドライブ以降、雅彦は景子との関係をどのように終わらせるかを考えるようになった。

まるで俺は景子のヒモではないか。景子との関係をこのままズルズルと引きずってはいはダメだ。

しかしながら現実には、景子の饒舌と長い髪をふわりと広げる癖、その容姿に魅了され続けていた。

瞬く間に年が明け、3月となった。

卒業式の日、式典が終わり講堂から出ると、雅彦は景子から封書を一枚渡された。中には海を背景にポーズを決めた景子の写真が入っていた。ブルーのジャケットに白いパンツスーツ、長い黒髪、ほんの少し首を傾げ、まるで少女のような笑みを浮かべている。

「……能登半島、忘れないでね」

景子はそう言い残すと立ち去った。彼女からの別れのメッセージ。これまでの二人の関係も終わりにしよう、という意味を含んでいる。雅彦にはそう受け取れた。彼は景子の後ろ姿を目で追った。長い黒髪が風に揺れていた。その長い黒髪を彩るように桜の花が舞っていた。

風誘う花の名残の華やかさ

雅彦の心に匂が浮かんだ。そして、俺にとっては華やかな青春だった、と思った。

雅彦が景子の死を知ったのは、それから数年後のことだった。

首都高での多重事故で何名か亡くなったらしいというニュースは昼の速報で知っていた。だが、夜のニュースで死亡者リストに景子の名が刻まれているのを見つけると、雅彦は茫然自失となった。雅彦は、無意識に封書の中から景子の写真を取り出すと、暫く眺めた後、それを営業用の黒革の手帳に挟み込んだ。眠れぬ夜を過ごし、朝、出勤すると、雅彦は窓に寄り眼下に広がる公園を見下ろした。ミッドナイトブルーのスーツに銀縁メガネを掛け、もはや証券マン以外の何者でもない雅彦は、時間の許す限り、咲き誇る桜の花を見ていた。

雅彦は目を開けると、セピア色の景子を見た。能登半島かアと呟くとテレビを消した。写真の背景の能登の海に、何故か桜の花が舞っているような気がした。

End